

## 事後評価報告書(日-イスラエル研究交流)

1. 研究課題名:「ラミニン由来活性ペプチドを用いたヒト胎児幹細胞由来ドーパミン作動性神経細胞包埋型マトリックスの開発ーパーキンソン病細胞治療の実現にむけて」

2. 研究代表者名:

2-1. 日本側研究代表者:学校法人東京薬科大学薬学部 教授 野水 基義

2-2. 相手側研究代表者:ヘブライ大学病院幹細胞センター 教授 Benjamin Reubinoff

3. 総合評価: ( A )

4. 事後評価結果

### (1)研究成果の評価について

日本側が有するラミニン由来活性ペプチド-高分子多糖マトリックスの技術と相手国側が有するヒト胎児幹細胞作成技術が相互に補完しあうことにより、神経細胞への分化を促進するが増殖を阻害するラミニン由来ペプチド含有マトリックスを同定することができた点は評価できる。相手国ではヒト ES 細胞の扱いに関する規制が緩やかであり、本共同研究で迅速に研究を進めることができた。一方で、研究成果の記載についてはやや具体性、客観性に欠けているように見受けられ、研究成果の重要性がより明確に示されると良かった。

### (2)交流成果の評価について

比較的積極的な交流活動が行われたが、相手国から日本への派遣は平成 23 年の一人にとどまっており、相手国からの積極的な派遣が望まれた。

### (3)その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

本事業で開発されたラミニン由来ペプチド含有マトリックスは特許申請されることが望まれる。相手側研究チームとの共著論文が無い点は残念である。腫瘍化リスクをなくした細胞治療の確立は、再生医療の発展にとっても重要な課題であり、長期的な安全性情報収集の重要性をふまえて、今後もより優れたマトリックスの開発を手掛けていただきたい。